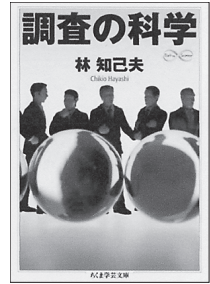


●林知己夫 著

（筑摩書房，2011年，文庫版，212頁，1,050円）

●米田 正人

（国立国語研究所名誉所員）



本書は、1984年に講談社からブルーバックスシリーズの1冊として出版され、その後絶版となっていた『調査の科学——社会調査の考え方と方法』が「ちくま学芸文庫」として2011年に再刊されたものである。

全編を通して複雑な数式をほとんど使わず、平易な文章でわかりやすく書かれた書物であるが、単なる入門レベルの記述ではなく、統計数理の核心に触れる示唆に富んだ記述が随所に見られる内容となっている。

著者である林知己夫先生は、第二次大戦のさなかに大学を卒業、陸軍航空本部にて特攻機の攻撃方法に関するデータ解析に従事されたそうである。そのときの経験から生まれた、「調査という道具で社会を見たり、考えたりする」というご自身の調査に対する実践哲学を「序章 社会調査の心」で披露し、本論への導入としている。以下、章立てに従って内容を見ることにする。

「第1章 社会調査の論理」では、社会調査を実際に企画する場合、“外的基準がある”場合と“外的基準がない”場合の2つの立場を認識する必要があること、社会調査は因果関係を明らかにするものではなく、問題発見の論理、現象探索の論理に立ったものであること、という基本的立場を説明し、数理統計学で行われる仮説—検定の限界について述べ、次章以降へ結びつけている（冒頭から専門用語の羅列になってしまったが、本書ではこれらの用語を丁寧に説明している）。

「第2章 調査の基本——標本調査の考え方」では、調査対象としてのユニバース、母集団、標本といった概念、標本抽出調査、母集団推定の精度・推定の方法等を具体的な数値を交えてわかりやすく解説している。

「第3章 質問の仕方の科学」では、国民性調査、1956年日ソ交渉における北方領土問題に関

する世論調査、憲法改正をめぐる世論調査等々を例に、調査の仕方や調査の限界などを詳説し、「第4章 調査実施の科学」では、実査にかかわる調査員による誤差、回収率低下にかかわる誤差をはじめとした「非標本抽出誤差」について言及している。

「第5章 データ分析のロジック」では、非標本誤差を無視した統計的検定に対する警鐘を鳴らし、部分集団別（属性別）分析の重要性、クロス集計の注意点、多次元的分析の必要性へと話は進む。さらに、パターン分類の数量化（質的データの数量化）の仕組みを懇切丁寧に解説している。章後半では継続調査、さらには国際比較調査の重要性へと話は展開する。

「第6章 調査結果をどう使うか」では、社会調査の応用としての市場調査、視聴率調査、選挙予測等に関する考え方が述べられ、以下のように本編が締めくくられている。「社会調査の結果は他の方法では知り得ない世の中のある重要な局面を示す一つの重要な指標である。調査の性格をわきまえてそれを正しく使うことが、社会調査の倫理でもあり論理なのである。」

ブルーバックス版にはなかったものであるが、巻末には吉野諒三先生（統計数理研究所データ科学研究系教授・調査科学研究センター長）による再刊に寄せた解説が、「解説 データの科学の真髄」として掲載されている。林先生が歩んでこられた時代背景や本編の補足が述べられていて、本編の理解がさらに進むよう配慮されている。

以上で見てきたように、「社会調査」をわかりやすく解説した書物なので、調査に携わっている実務者、研究者、またこれから調査の世界に足を踏み入れようとしている学生、さらには行政に携わっている人、医療関係の人等々、幅広い方々に是非読んでもらいたい1冊である。